

農業環境インベントリー研究への期待

— 10号の発刊に当たって—

Perspectives of Natural Resources Inventory Center

對馬誠也*

Seiya Tsushima

2001年の独立行政法人農業環境技術研究所（以下、農環研）の発足と同時に、農業環境インベントリーセンター（以下、インベントリーセンター）が発行を開始した雑誌「インベントリー」が今回で第10号となりました。本誌では、インベントリーセンターの成果を中心に、とくに論文にし難いもの、あるいはすでに公開中の各種データベース等の利用方法などをわかりやすく解説した記事を掲載してきました。その目的は、一般にはなじみの少ないインベントリー（在庫目録の意味。研究所においては、各種データベースなどの基盤情報を指す。）を研究テーマとしているインベントリーセンターの取り組みを一人でも多くの方に知ってもらうことにありました。同時に、農業環境インベントリー情報を実際に広く利用してもらうためには、研究、論文作成以外の多くの取り組みが必要であることも知ってもらいたいとの思いもありました。

インベントリーセンターの研究者も他の研究者と同様に、中期計画に基づいた研究課題に取り組み、数多くの研究論文を作成して公表していますが、その一方で、長期的視点に立った標本・情報の収集・管理、データベース構築、利用マニュアルの作成、Web公開、標本館の見学対応など様々な業務を行っています。インベントリーセンターでは、これらの作業は研究論文作成と同じくらい重要であり、研究推進と基盤情報の整備を同時に行うことが、まさにインベントリーセンターの役割だと考えています。第10号を編集するに当たり、10年間のそうした取り組みにより、これまでになく多くの成果が出てきたと感じています。一例ですが、「研究トピックス」には9つの成果が掲載されています。土壌分野では、長年のインベントリー情報を基にして群馬県片品村で「精密土壌図」が作られました。また、所内のデータベースの統合も順調に進み、気象・土壌・農地利用・温室効果ガスをまとめて閲覧できるWebシステム(gamsDB)も開発されています。このように、インベントリーセンター発足10年目にして、「所内で収集蓄積した貴重なインベントリー情報」の「見える化」が着実に進みつつあると考えています。

インベントリーセンターは、土、昆虫、微生物だけでなく、大気、気象、水、生物等々農業環境をとりまく様々な情報を収集するとともに、多くの人が利用できるシステムを作ることを目的としています。その研究は常に、短期、中期、長期的視点に立って、情報を収集し維持するとともに、その時代のユーザーを常に意識した情報発信システムを作ることが重要であると考えます。

*農業環境インベントリーセンター長

Natural Resources Inventory Center

インベントリー, 第10号, p1-2 (2012)

昨年は、福島第一原発事故による放射能汚染に際し、当所で公開した「主要穀物および農耕地土壌の⁹⁰Sr および¹³⁷Cs のデータベース」(本誌第8号掲載)が行政等で利用されました。これはまさに長年のモニタリング情報の蓄積の成果だと考えます。

その一方で、最近のIT技術、研究の進展もすさまじく、「集合知」、「クラウド」などで代表される「膨大な情報を解析した研究」が著名な国際誌で見られるようになりました。このことは、長期的視点に立った情報の蓄積と、時代に遅れることなくニーズに対応するシステムの構築を同時に進める必要があることを意味しています。また、このような研究は、インベントリーセンターがまさに新しい「融合研究」の拠点になる可能性もあると考えています。こうしたことを思いながら、今後もインベントリー情報が広く役立つように様々な媒体、イベントを通して宣伝していきたいと考えています。